

『無名草子』の女性論—伊勢の御息所を中心に

古門 香

一 はじめに

現存最古の文芸評論書と目される『無名草子』の成立は、建久九(一九八)年から建仁二(一一二〇)年と推定されており、作者については藤原俊成、藤原俊成女、上覚、式子内親王が挙げられ、なかでも藤原俊成女と見るのが有力である。このような成立背景を有する『無名草子』の特徴として留意すべきは、次の三点と考えられる。

まず、作品の話題選択と評価についてである。『無名草子』は複数の女房たちが、この世で捨てがたいもの、物語、歌集、さらには女性を話題にして語り合い、評価をしている。このような女房たちの話題選択とそれに対する評価内容から、当時の文芸・美に対する価値観や意義を見出すことができよう。

次に、説話の撰取についてである。先行研究で多く取り上げられているように、『無名草子』には物語の影響や説話の撰取が認められる。特に「女性論」では説話を撰取し加工することに

より、既存の説話としてではなく、「女性論」の一端を担う女性像を描き出していると推察することができる。これらの説話改編の意味を明らかにすることは、取り上げられている話題に対する価値を明確に示すことに繋がるだろう。

最後に作品の形式についてである。女房たちが相互に話題提供しながら展開する形式は、『宝物集』や『源氏物語』の「雨夜の品定め」(帚木)、『大鏡』、『今鏡』に認められるとの指摘が既に行われている。ただし、それらの先行物語は男性が語り手であったり、話題の中心であったりする。それに対して当該作品では話題の多くが女性と関わる内容であり、それを女性が語り、女性が聞くのである。このように語り手、聞き手、話題人物のいずれもが女性を主軸に展開しているのが『無名草子』の特質の一つと理解でき、ここに当該作品を俎上に載せる研究的意義が見出されよう。

これらの特徴に鑑みたときに「女性論」が『無名草子』中で大きな役割を担っていると考えられる。「女性論」については早く桑原博史氏が全体構成を明らかにして以降、基本的に桑原論を基調に「女性論」研究は展開している⁴と認められる。しかし、それらの研究にみられる「女性論」に登場する女性たちの配列や、語られる内容とその意図については、女性たちの具体的な描かれ方に即して今一度考察を加える余地があると考える。

以上のことを踏まえ、本稿は女性たちが女性を話題として語

り合い評価するという『無名草子』の特徴に着目し、その中心となる「女性論」の分析を通して『無名草子』の本質の一端を明らかにしようとするものである。なお考察に際しては、「女性論」の内容や構成、配列の有り様を手がかりにするのみならず、作品全体の構成、配列、さらには作者や時代背景にも留意したい。

二 「女性論」で描かれている伊勢の御息所

本稿では「女性論」で取り上げられている女性たちの中でも、特に伊勢の御息所を取り上げて考察を加える。

二・一 伊勢の御息所の描かれ方と評価

まず、伊勢の御息所が『無名草子』中でどのように描かれているのか、そしてどのような評価を得ているのかを本文に即して順に整理する。

① 「まことに、名を得て、いみじく心にくくあらまほしきためしは、伊勢の御息所ばかりの人は、いかでか昔も今もはべらむ。」

② 寛平法皇が出家なさった後、寂しくひっそりと籠もっていた様子。
(様子)

↓「たぐひなくいみじくおぼゆれ。」

③ 庭は桜の花びらが散り敷いて真つ白でありながら、苔があちこちにはえている。邸は、帽額の簾が所々破れ、古びていてものさびしい。

④ 醍醐天皇の御世に、若宮の御袴着の屏風歌を依頼され、「散り散らず…」の和歌を詠んだ。

↓「返す返す、心も言葉もめでたくおぼえはべれ」

伊勢の御息所への評価が見える部分は、①と②、④である。

③は伊勢の御息所の庭や邸の様子であるが、この描写は「神さび心細げなり」という言葉でまとめられている。これは②の「つれづれにて籠り居たりけむ有様」を具体的に示しているようでもあり、④の和歌を詠んだ時の情景描写のようでもある。特に④につながる描写の場合、③があることで伊勢の御息所をどの様に読むことが出来るのであろうか。

「女性論」中で伊勢の御息所と類似した状況、つまり華やかな生活を送っているとは思えない状況にいる女性として、皇后定子と大斎院選子が挙げられる。彼女たちの描かれ方や評価点を手がかりに、③の伊勢の御息所の描かれ方、さらに「女性論」中の位置づけを考えていきたい。

二・二 皇后定子と大斎院選子の生活とその評価

皇后定子と大斎院選子の生活に関する部分とその評価を以下

に整理する。

【皇后定子】

① 中の関白殿(父)が亡くなり、内大臣(兄)が流され、家が衰退して、定子はひっそりと不安な様子でいた。

② 頭の中將が邸を訪れたときに、若い女房がきちんとして定子にお仕えしており、頭の中將が定子を軽く見ていたことを女房たちは浅はかであったと思った。

③ 頭の中將が「庭の草を払いなさいよ」と申し上げたところ、侍女の宰相の君が『露置かせて御覽せむとて』と答えた。

↓「なほ古りがたくいみじくおぼえさせたまへ。」

【大齋院選子】

① 老い衰えて、人がめつたに訪れなくなった。

② 殿上人がそつと邸を訪れたときに、庭の様子や、大齋院や女房の行いが風雅であった。

↓「さは、かかることこそと、めづらかにおぼえける、ことわりなり。」

このように皇后定子と大齋院選子はその生活を取り上げて描かれ、評価されている部分がある。この二人の共通点は、家が衰退しても人目が無くても自分の意思を貫いて生活を送っている

点である。そしてその貫いているものとは風雅の心である。皇后定子、大齋院選子は風雅の心を忘れずに実践しており、それに対して評価の言葉が見られる。

二二二 伊勢の御息所と皇后定子、大齋院選子の比較

先に見た皇后定子、大齋院選子と伊勢の御息所を比較してみる。女房たちは、皇后定子と大齋院選子の生活の中に風雅の心を読み取って、評価していることがわかる。それに対し、伊勢の御息所の場合は、庭や邸の様子については「神さび心細げなり」という言葉でまとめられているだけであり、女房たちもそこから風雅の心を感じとっている様子はない。その点では皇后定子や大齋院選子とは異なる。しかし、どの様な状況でも自分の意思を貫き、風雅を実践していたという点は共通している。伊勢の御息所は古びてもさびしいような住まいに籠もっているながらも、素晴らしい和歌を詠んでいる。これは、皇后定子や大齋院選子の様に、どのような状況でも風雅の心を忘れずに実践した、ということになるだろう。

二四 伊勢の御息所の評価点

以上のことを踏まえると、伊勢の御息所は、庭や邸の情景描写があることで、世間から離れてものさびしい場所で生活しているが風雅の心を忘れずに実践している、ということの評価さ

れていると読むことができる。「返す返す、心も言葉もめでたくおぼえはべれ」の「心」は単に和歌の内容や和歌を詠む感覚、心得などではなく、どのような状況でも風雅を實踐している姿勢も含めているのではないだろうか。

三 「女性論」の構成とその主題

三・一 「女性論」の構成と主題

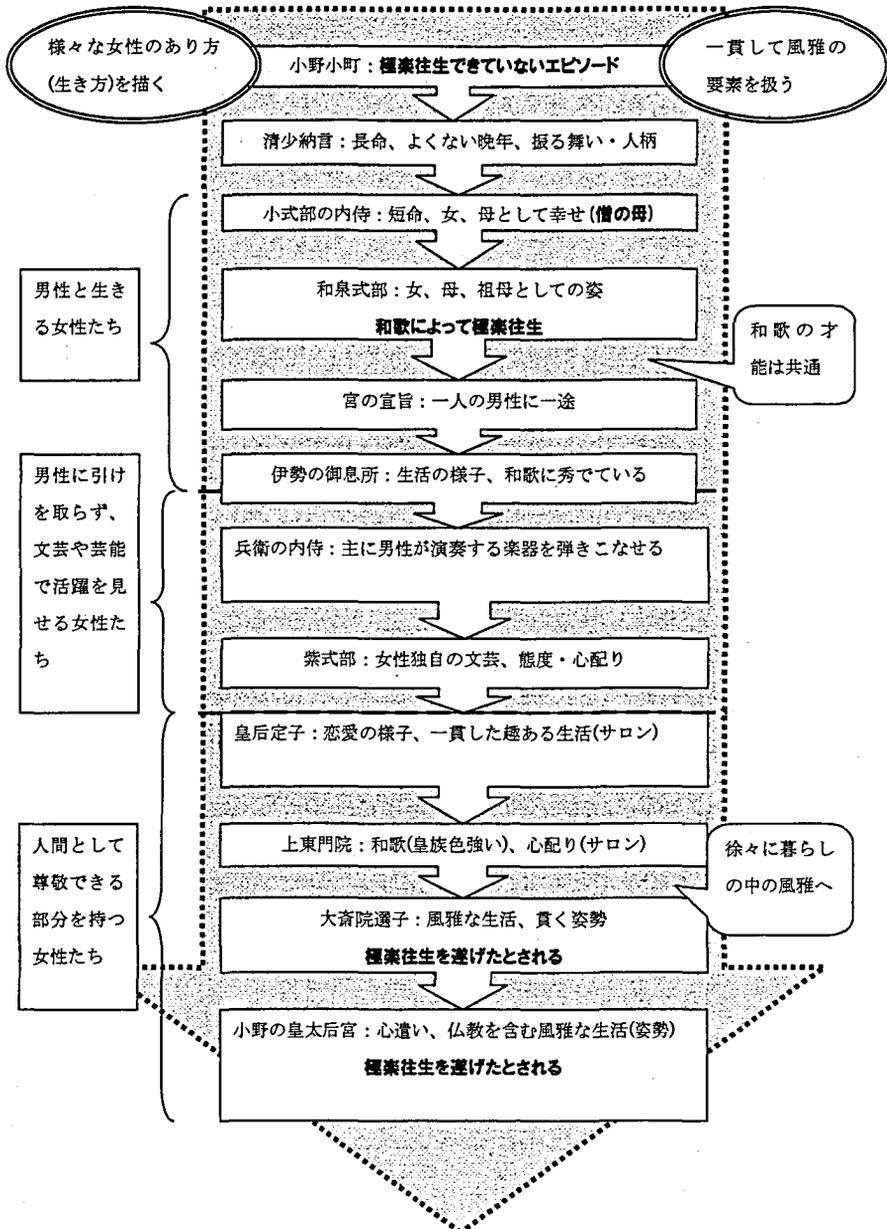
「女性論」の構成については様々に考えられている。

「女性論」全体について最初に検討を加えた桑原博史氏は「無名草子の女性論」（『中古文学』八、一九七一年九月）で、女性の登場年代、女性論の配列、登場する女性たちの扱われ方の差、出典の変形について述べている。女性の配列については、ある女性からの連想で次の女性が語られるという工夫がされているとしている。また、扱いの軽重の差から、女性たちは後世に残る和歌や散文作品を創造した女性群と、降下していく環境の中で優雅な生き方をくずさない心の持ち主たちの二つのグループに分けられるとし、前者から後者へと展開するのに伴い、「女性論」は文化論から人生論へとなっているとしていることを指摘している。

川島絹江氏は「女性論―説話の撰取と受容を中心に―」（『源氏物語』の源泉と継承』笠間書院、二〇〇九年三月）で、「女性論」の構成は前半に宮廷才女群、後半に後宮貴女群が配されて

いること、そして極楽往生を遂げたとされる大斎院選子と小野の皇太后宮が最後に位置していることから風雅に徹することが極楽往生を妨げることにならないという主張が見えるということとを指摘している。

これらの先行研究からも女性たちの配列には作者の意図があるということがわかる。先行研究の見解や、女性たちの扱われ方、つまり「女性論」の内容から「女性論」の構成について次のような見通しを持った。



「女性論」には三つの要素が見られる。「女性」はもちろんであるが、「風雅」と「仏教」について扱われている。

まず、「女性」についてであるが、「女性論」では様々な女性のあり方・生き方を描いている。その女性たちの姿や女房たちの評価から、女性の姿は以下の三つのグループに分類できる。

A 男性と生きる女性たち

B 男性に引けを取らず、文芸や芸能で活躍を見せる女性たち

C 人間として尊敬できる部分をもつ女性たち

そして「女性論」はAからCへと展開している。

次に、「風雅」についてである。「女性論」では「風雅」が一貫して扱われている。それは和歌から始まり、楽器や物語などが扱われながら徐々に生活の中の風雅へと展開していく。

そして「仏教」である。「仏教」については一貫して扱われているわけではないが、川島氏が指摘するように極楽往生を遂げられなかった小野小町が冒頭に位置し、極楽往生を遂げたとされる大斎院選子、小野の皇太后宮が最後に位置していることに意味があると考ええる。

この「女性」「風雅」「仏教」は、「女性論」の主題なのではないか。当時、仏教の立場から女性や物語は否定的に扱われていた。また『無名草子』『歌集の論』に

昔より、いかばかりのことかは多かめれど、あやしの腰折れ一つ詠みて、集に入ることなどに女はいとかたかめり。

とあるように、和歌の世界でも女性が活躍するのは難しかったようである。

しかし「女性論」で風雅に秀でている女性の姿を取り上げ、最後に極楽往生を遂げた女性を配置している。つまり「女性」「風雅」「仏教」は共存可能であるということを示したかったのではないだろうか。『無名草子』の作者は藤原俊成女であるとする説が有力であるが、作者が女性であるとすれば、「女性論」でこのような主題を示すことにもうなずける。

三二一 伊勢の御息所の位置づけから

ここで先ほど取り上げた伊勢の御息所を例に、具体的に配列をみってみる。

伊勢の御息所の前には宮の宣旨が位置し、後ろには兵衛の内侍、紫式部が位置している。宮の宣旨は正気を失うほどに一途に一人の男性を思い続けたという姿が描かれている。これは「男性と生きる女性」の姿である。これに対して、兵衛の内侍は男性が演奏するのが一般的だった琵琶を弾きこなせる女性として、そして紫式部は女性独自の文芸である物語の作者として描かれている。これは「男性に引けを取らず、文芸や芸能で活躍を見

せる女性たち」の姿である。つまり伊勢の御息所は「男性と生きる女性たち」と「男性に引けを取らず、文芸や芸能で活躍を見せる女性たち」の間に位置している。

伊勢の御息所自身はというと、その両方の姿が描かれている。伊勢の御息所が寂しくひっそりと籠っていたことが語られているが、その原因は宇多天皇の出家である。この部分に伊勢の御息所の男性と生きる女性としての姿を見ることが出来る。しかし、そのようなきつかけで世から離れた生活をしていても風雅の心を忘れず、素晴らしい和歌を詠んでいる。男性に左右されるだけではなく、自分らしい生き方をしているところに男性からの自立を見ることが出来るだろう。男性に寄り添いながら生きる女性の姿と、男性から自立して和歌で活躍を見せる女性の姿をもつ伊勢の御息所は、「男性と生きる女性たち」のグループと「男性に引けを取らず、文芸や芸能で活躍を見せる女性たち」のグループの橋渡しの役割を担っているのである。

これは一例であるが、「女性論」は「女性」「風雅」「仏教」の共存という主題にあわせて配列に工夫がされていると考える。

四 『無名草子』の全体構成

四・一 「いとぐち」と「女性論」

『無名草子』では、語り手と聞き手として女房と老尼が登場する。彼女たちの出会いを描き、語りの場を設定しているのが

『無名草子』冒頭の「いとぐち」である。この「いとぐち」に登場する老尼は「女性論」で取り上げられる女性たちの要素である「女性」「風雅」「仏教」を兼ね備えている人物である。「いとぐち」において老尼の仏道修行に励む姿や、和歌を詠んでいる姿が描かれているだけでなく、かつて宮仕えていたと老尼自身が語っている。つまり上流階級の風雅な生活に身を置いていたのであり、風雅を解していると考えられる。

この老尼は「いとぐち」で詳しく描かれているのだが「いとぐち」以降の各論では語らず、最終的に女房たちの語りによって老尼と同じ要素を持つ女性たちを語る「女性論」に行き着くのである。このことから『無名草子』の中で「女性」「風雅」「仏教」が首尾一貫しており、老尼は主題を示す象徴と言えるのではないか。

四・二 『無名草子』の全体構成と現れる要素

『無名草子』全体の内容と構成をみてみると、「女性」「風雅」「仏教」の要素がみられる。

「いとぐち」には「女性」「風雅」「仏教」の三つの要素を備えた老尼が登場し、女房と出会い語りが始まる。

「捨てがたきふしぶしの論」では月、手紙、夢、涙、阿弥陀仏、法華経と「風雅」の要素から「仏教」の要素へと展開している。

「物語論」では『源氏物語』、『源氏物語』以後の作り物語、

歌物語が取り上げられている。物語は一般的に女の手によるものという認識であり、女性による文芸である。つまり物語は「風雅」の要素であり、かつ「女性」の要素も含んでいる。内容としても『源氏物語』の女性論、男性論があるが、女性論では「めでたき女」「いみじき女」「好もしき女」とテーマを立てて語っている点から、女房たちは男性論よりも女性論に興味があると考えられる。

「歌集の論」は題材としては、「風雅」の要素を扱っている。しかし、女性が歌集を選ぶことがなく残念であるということも語られていることから、女性の立場についても言及しており、「女性」についても扱っているといえる。

そして最後に「女性論」である。「女性論」は先述したように、「女性」「風雅」「仏教」の三つの要素を扱っている。

「終章」では男性論に触れようとする女房たちの意思がみえるが、男性に関しては『世継』や『大鏡』を見ればよいとし、男性論は語られずに『無名草子』は閉じられる。このことから語り手の関心が女性にあることがわかるが、この「終章」は具体的な内容や女房たちの評価がないことから『無名草子』中で各論などのような大きな役割は無いと考える。

今『無名草子』の各論を「女性」「風雅」「仏教」の要素に注目して整理したが、「いとぐち」で「女性」「風雅」「仏教」の全ての要素がそろい、各論で三つの要素のいずれかを扱い、最終

的に「女性論」で「女性」「風雅」「仏教」の全てを扱っていることがわかる。『無名草子』全体でこの三つの要素が主題に関わる重要なものとして現れているのではないか。そして三つの要素が揃っており、かつ、論の中で最後に位置する「女性論」が『無名草子』の核論ではないだろうか。つまり『無名草子』全体で「女性」「風雅」「仏教」の共存を主題としていると考え、「いとぐち」と「女性論」はその主題で首尾対応しているといえる。

『無名草子』の全体構成

風雅、女性、仏教の共存

いとぐち

風雅に精通した老尼。
女性論で取り上げられている要素を兼ね備えている。

風雅→仏教

捨てがたきふしぶしの論
(月、手紙、夢、涙、阿弥陀仏、法華経)

物語論

(『源氏物語』(卷々の論、女性論、男性論、ふしぶしの論)、『源氏物語』以後の作り物語、歌物語)

対応

物語 = 風雅の一部

風雅。しかし否定的。
女性の嘆き。

歌集の論

(勅撰和歌集、私家集、題詠歌)

すべて風雅を解している女性。

女性論

(小野小町、清少納言、小式部の内侍、和泉式部、宮の宣旨、伊勢の御息所、兵衛の内侍、紫式部、皇后定子、上東門院、大斎院選子、小野の皇太后宮)

極楽浄土を遂げたとき
れる女性へと展開する。

実在の女性を基に、仏教、風雅、女性の全ての要素を論じる。

終章

【注】

1 成立年代ならびに作者の推定については『日本古典文学大辞典』（岩波書店、一九八四年一〇月）の「無名草子」の記述（鈴木弘道執筆）に概ね従う。

2 桑原博史「無名草子の女性論」（『中古文学』八、一九七一年九月）、森正人「無名草子の構造」（『国語と国文学』五五・一〇、一九七八年一〇月）、菌部幹生「無名草子の女性論—古本説話集との問題から—」（『駒沢国文』二二、一九八五年二月）、菊地仁「無名草子」の女流作家評（『解釈と鑑賞』五一・一一、一九八六年一月）、田中貴子「中世の女性と文学—「無名草子」を中心に」（嶋田晴子・S. B. ハンレー編『ジェンダーの日本史 下—主体と表現 仕事と生活—』東京大学出版会、一九九五年一月）、川島絹江「いとぐち部分の虚構の方法—女性論—説話の撰取と受容を中心に—」（『源氏物語』の源泉と継承』笠間書院、二〇〇九年三月）参照

3 森正人「無名草子の構造」（『国語と国文学』五五・一〇、一九七八年一〇月）、高橋亨「王朝（女）文化と『無名草子』」（『古代文学研究 第二次』一〇、二〇〇一年一〇月）、川島絹江「いとぐちの部分と虚構の方法—「無名草子」における「捨てがたし」について—」（『源氏物語』からの継承—」（『源氏物語』の源泉と継承』笠間書院、二〇〇九年三月）参照

4 鈴木弘道「無名草子「女性論」の特質（一）「女性論」の形式」（『無名草子論—「女性論」を中心として』大学堂書店、一九八一年一月）、注2川島絹江「『源氏物語』の源泉と継承」所収論文は、いずれも注2桑原博史論を基調に考察が行われている。

5 括弧内は語り手の評価の言葉である。引用は樋口芳麻呂・久保木哲夫（校註・訳）『松浦宮物語 無名草子』（小学館、一九九九年五月）による。

6 引用は、樋口芳麻呂・久保木哲夫（校註・訳）『松浦宮物語 無名草子』（小学館、一九九九年五月）による。

【参考文献】

片岡利博『無名草子』の撰集評について（『中古文学』二五、一九八〇

年四月）

片寄鈴枝「無名草子に見られる私撰書覚書」（『日本女子大学紀要（文学部）』四、一九五五年二月）

川島絹江『源氏物語』の源泉と継承』（笠間書院、二〇〇九年三月）

菊地仁「無名草子」の女流作家評（『解釈と鑑賞』五一・一一、一九八六年一月）

桑原博史「無名草子の女性論」（『中古文学』八、一九七一年九月）

後藤晃子「無名草子」における人物評価語句について（『日本語文化研究』四、二〇〇一年二月）

鈴木弘道「無名草子「女性論」の特質（二）「女性論」の形式」（『無名草子論—「女性論」を中心として』大学堂書店、一九八一年一月）

鈴木弘道「無名草子の小式部内侍評言私注」（『相愛大学研究論集』三、一九八七年一月）

鈴木弘道「無名草子の和泉式部評言私注—「もの思へば」奥山に」の歌を中心として」（『平安文学研究』七九・八〇、一九八八年一〇月）

鈴木弘道「無名草子の和泉式部評言冒頭私注」（『相愛国文』二、一九八九年三月）

鈴木弘道「無名草子の小式部内侍評言私注Ⅱ」（『相愛大学研究論集』四、一九八八年三月）

鈴木弘道「無名草子の小式部内侍評言私注Ⅲ」（『相愛大学研究論集』五、一九八九年三月）

菌部幹生「無名草子の女性論―古本説話集との問題から―」（『駒沢国文』
二二、一九八五年二月）

高橋亨「王朝〈女〉文化と『無名草子』」（『古代文学研究 第二次』一〇、
二〇〇一年一〇月）

田中貴子「中世の女性と文学―『無名草子』を中心に―」（脇田晴子・S. B.
ハンレー（編）『ジェンダーの日本史 下―主体と表現 仕事と生活―』東
京大学出版会、一九九五年一月）

間中富士子「和歌に現れた仏教思想」（『鶴見女子短期大学紀要』、一九五
五年一月）

森正人「無名草子の構造」（『国語と国文学』五五・一〇、一九七八年一〇
月）

横井孝「女」たちの物語史―『無名草子』論―」（『駒沢国文』二〇、一
九八三年三月）

（ふると かおり 南砺平高等学校）